

### <総括>

試験時間	120分	総解答字数	1400~1600字
------	------	-------	------------

環境情報学部の入試はこここのところ傾向が一定せず、毎年のようにきわめて個性的な問題を出題しており、趣向と傾向は猫の目のように変化して、果たしてこの学部に一貫した入学させたい学生の像があるのか、どのような能力を試したいのか模索中というように見えたが、今年に至って現在の大学が直面する行き詰まりを明らかにするような問題が出題された。慶大SFCが20年以上も前に出題した小論文の問題を引っ張り出して、ここで試したかった能力はなんだろうかとの現在の受験者に質問したうえで、現在自らが実施すべき大学入学試験として適切なものは一体どのようなものなのだろうかを受験者に問うというのは、受験生のモチベーションを下げる入学試験である。

こうした状況は、時代の先端を追っていたはずの環境情報学部にも最も深刻なかたちで現れており、現代の大学の直面している危機を顕わにしている。生成AIによって知の生産の大部分がアウトソーシングできるのだから、大学で知の生産の技術を身につける必要はなくなってしまふ。大部の学術書と格闘しながら思想を形成することも、自分ならではのオリジナルな何かを生成していくための準備も必要ではない。ICTによって先端を追求し続けた結果生み出したAIによってすべてを代替されてしまえば、後はそのAIを巧みに活用するだけの能力しか求められないのだ。それはもはや「知」とは言えまい。それはいわゆるジェネリック・スキルではあっても、いわゆる未来を創造していく「知」とは言えないのだ。

なお設問で「今から4年後の2028年2月」とあるので、その頃に環境情報学部は新しい入試形態へと移行し、小論文試験ではなくオーディション型、あるいはインターンシップ型と呼びうるような入試を導入することを模索しているのかもしれない。これはそもそも九州大学の21世紀プログラムなどで行われていたもので、そのためのアイデアを受験生から募集するような内容である。

### <課題文の分析>

大問番号	
内容 (主題)	慶大SFCの入学試験の新趣向
出典 (作者)	過去の慶大SFC学部の出題した入試問題
長短・難易等 前年比較	長短 (短い・やや短い・変化なし・やや長い・長い) 難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

### <大問分析>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント(設問内容・論述ポイントなど)
問	課題文	学部系統的	設問1	説明	300字	1990年代に慶大環境情報学部または総合政策学部が出題した知に関わる小論文の入試問題3つについて、それらの問題に共通する領域と構造、受験生に求めている知的能力について述べる。
			設問2	説明	300字	環境情報学部または総合政策学部が過去出題した数学の入試問題3つについて、これらの問題に共通する構造と受験生に求めている知的能力について述べる。

# 小論文

			設問 3-1	論述	300 字	<p>今から 4 年後の 2028 年 2 月に、SFC で新しい大学入試の在り方を問うコンテストが行われることになり、次のような要件を満たす、半日をかけた入学者選抜試験のモデルをつくることになった。</p> <p>要件 1 設問 1 および設問 2 で解答した知的能力に加えて、自分自身の思考の特徴を発揮できること。</p> <p>要件 2 入学者選抜のために必要な採点評価が行われるべきこと。</p> <p>要件 3 その採点評価にあたって第三者の誰かもしくは受験者がお互いに評価しあうことも考えること。</p> <p>要件 4 現在の慶大環境情報学部が実施している小論文試験や AO 入試と同じ形式ではなく、新しい形式を考えること。</p> <p>その試験ではスマホや PC、インターネット、AI は利用可であり、受験者の知的能力が公平に計測されることが明確に説明されなければならない。場所は日吉キャンパスの敷地内、時間は午後 1 時に開始して遅くとも午後 7 時に終了とする。</p> <p>以上で①設問 1) および②設問 2) で解答した知的能力、③自分自身の思考の特徴を簡潔に数文字から 20 文字程度で書いたうえで、④その試験の出題意図を述べる。</p>
			設問 3-2	説明	500 字前後	<p>その試験の内容を具体的に説明する。どういった分野のどのような資料や問題や実技を組み合わせるとどのような知的能力を図り、どのような仕組みで受験者の能力を数値化もしくは相対化するかを述べる。</p>

※出題形式は「テーマ・課題文（英文を含む場合は付記する）・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

## ＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

## ＜答案作成上のポイント＞

設問 1) と設問 2) はおそらく配点が低い。易しい問題なので、さっさと終わりにしたい。なお設問 1) の 1990 年代に出題された慶大 SFC の小論文問題は、その頃から慶大 SFC と付き合ってきたこのポイントの執筆者としては懐かしい限りだが、「カオス」「不確定性」「インターネット」といった、現代ではすでに先端性を失ってしまった概念がいかにも先端として語られているなど、やはり時代的限界が感じられ、現在から見れば、隔世の観を否めない。これらについて現代の Z 世代の受験生に何らかのコメントを求めることはやや意図をはかりかねるところでもある。

メインは設問 3) であるわけだが、この設問は受験生には大変厳しい要求をしているようだ。そもそも現代の学生たちが課題を ChatGPT に投げて、知的作業を完全にアウトソーシングし大学の教育課程をスルーしていくことに深刻な問題があるわけだが、受験生がスマホ、インターネット、AI を駆使できるなら言ってみればカンニングし放題ということであり、この問題一つとってみても解決策を提示することは困難である。

もうひとつ、難問は、「受験者がどのような知的能力をどう発揮しているかを測れるか」を説明できなければならないとしているが、知的能力が本質的に「知」の能力である場合には、それはきわめて抽象的なもので、そもそもそれを客観的に定量的に評価することはほとんど不可能であるということである。計算能力や文章のサマリーを作成する能力ならこれはおそらく何らかの形で客観的かつ定量的に評価可能であり、そしてそれはかなり高度なレベルまで現在では AI ができる。設問 2) で提示されている数学の諸問題などは AI が解くことが可能であり、その解く能力が定量的に評価できる最たるものであろう。これをいわゆる本質的意味での「知」の能力と呼べるかどうか。それは「読み書きそろばん」と言われるようなリテラシーの能力であり、知を獲得する上で必要とされるポテンシャルではあろうが、本質的な意味での「知」の能力とは言えない。

そこでこの問題では、先に設問 3-2) を書いてしまった方が戦略的に正しいだろう。「知」の能力をいわば形而上学的に考察するよりも、ある条件の下で可能な知的能力を試すテストを先に構想してしまうのである。まづスマホ、インターネット、AI の使い方のルールを決める。するともうそれだけで、基本的に試すことができるものが決まってしまう。また AO 入試などではなくテストなので、予め準備ができるものではなく、公平性を担保できるものでなければならない。となると、試験会場で全員が予測不可能な状況に直面し、それに対処する能力を試すということになる。そしてそれは小論文や数学の試験のような既存のペーパーテストではないものでなければならないから、あるタスクを作業によって解くというテストになる。

そしてそこに、これから SFC の学生となる者を選抜するものであるというフレーバーを漂わせなければならない。あるタスクを作業によってクリアし、そのスピードや正確さを検査するということになる、企業の SPI のようなものに近づいていってしまい、SFC ならではの試験にならないからだ。そこで SFC に入学後の活動を意識したタスクを課すことになる。

以上のようにしてテストの在り方を構想した上で、改めて設問 3-1) でそこで何が試されているのかを振り返って、①②③④を書いていくという段取りの方が、整合的に答案を書いていくうえで楽だろう。

設問 3-1) → 設問 3-2) という書き方もあるが、テストがクリアすべき「要件」や試験会場・時間その他の設定がとて多く、それをすべて満たしたうえで、さらに設問 3-1) を評価するようなテストの仕組みを開発するということになる、とても難しい問題になってしまう。500 字程度という解答字数ですべての要件を満たす答案は書けない。いくつかの要件のみ意識し、設問 3-1) で答えた能力をうまく評価できるような仕組み、と問題を単純化して捉えて、ゲーム感覚で答案を書いてみよう。

## ＜学習対策＞

この問題では 2028 年を入試改革年度と捉えているようだから、環境情報学部では暫く、小論文入試における模索が続くのではないだろうか。その際小論文入試を一種のゲームとして捉えて、戦略的行動を採るための頭脳の軟らかさ、そして問題の核心を洞察する能力が必要になってくる。生成 AI が汎用化されてきた現代、大学の存在意義とそこで獲得される知の能力について、重大な問題が提起され、ある知の生産の危機の時代が到来していることは明らかだ。それに対してあまり迷いをもたず、自分自身がどんなことを学び、どんな知の生産者になりたいかを明確にしていくことによって、ぶれずに問題に立ち向かっていくことができるのではない。